

社会主義ネーションの理想と現実  
-1960年代東ドイツでの個人的経験から-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2020-01-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下村, 由一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/20576">http://hdl.handle.net/10291/20576</a>

# 社会主義ネーションの理想と現実

—1960年代東ドイツでの個人的経験から—

下 村 由 一

**要旨** 本稿は、1960年から68年にかけて筆者が滞在先のドイツ民主共和国（東ドイツ）で経験したことを基礎に、社会主義ネーションの理想と現実を考察するものである。

周知のとおり、1961年8月、東西ベルリンの交通路が突如として封鎖され、まもなく壁の建設が始まった。すでに壁建設の前から多くの東ドイツ市民が西側へ流出しており、社会不安も募るさなかのことであった。今や可視化された東西の境界線上にはソ連軍と米軍の戦車が控えていた。これは、東西両陣営が互いの領域を犯さない限りにおいて政治的安定を確保したことを意味していた。そうした状況に一般市民もまた素早く順応していったのである。

1960年代はまた、冷戦期において対立の位相が変わる時期でもあった。その一つの顕著な例が中ソ対立の先鋭化であり、国際会議での通訳や翻訳などの仕事を通して、筆者自身もその舞台裏に関与していった。その時の経験を振り返ってみると、中ソ対立の根本には、アメリカの役割評価をめぐる立場の違いと平和共存のイデオロギーがあった。加えて、1963年に東ドイツが採用した「新経済政策」も中ソ対立を引き起こした要因の一つであったといえる。

新しい経済政策の展開を背景に東ドイツは、真の「ドイツ・ネーション」の形成に力を尽くし、教養文化や芸術分野での充実を図っていく。この頃の東ドイツは、自国こそ「ドイツ人民の民主的、進歩的な伝統を継承する国家である」と信じていた。しかし1960年代末以降、西ドイツが過去を清算する方向にかじを切ると、東ドイツは、自己の正統性をどこに根拠づけるべきか、再定義を迫られたのである。1972年12月には、いわゆる「両ドイツ基本条約」が調印され、ドイツ民主共和国とドイツ連邦共和国が互いに相手を独立の国家として認め合うという関係をつくるようになった。そのような状況において東ドイツは、「ドイツ社会主義ネーション」という理論づけを試みるも、こうした観念は、一般の市民のなかにはなかなか浸透しなかった。とはいえ、東ドイツの社会主義ネーション構築の試みが何の痕跡も無く終わったかどうかは、疑問の余地のあるところであろう。現実問題として、未だに、旧東ドイツの影を引きずって生きる人びとがおり、しかも、現在、「ドイツのための選択肢」などという運動がザクセンで非常に影響力を拡大している。これらのことを考えると、かつての東ドイツがドイツ史のなかの民主的な伝統を継承するために行った努力は、一体どのような実を結んでいたのか、あらためて問い直す必要があるだろう。

**キーワード**：東ドイツ、社会主義ネーション、中ソ対立、ベルリンの壁、平和共存

## はじめに

ここでは、1960年から68年にかけて私が滞在先のドイツ民主共和国（以下、東ドイツと略記）で体験したことをお話ししてみたいと思います。まず最初に、ベルリンで壁が建設される前後の時期、一般市民の日常生活はどのようなものだったのかを振り返ってみます（第1章）。次に、私が、中ソ対立の舞台裏に関わっていく様子を取り上げます（第2章）。そして最後に、東ドイツが目指した社会主義的なネーションとはどのようなものだったのかについて、その理想と現実の両面から考察していきます（第3章）。

## 第1章 ベルリンの壁建設前後の日常生活

### 第1節 東ベルリンへ行く

まず個人的なことからお話ししましょう。私は1960年の9月にベルリンに行きました。ベルリンに行きたいきさはいろいろありましたが、実は最初から東ドイツ、といいますか、ベルリンに行こうと思って出かけたわけではありませんでした。当初の計画では8週間ほどの滞在期間を予定していたのですが、気がついたら8年が経ってしまいました。若い世代の方はあまりご存じないと思いますが、当時の日本国の旅券というのは、有効期限が無く、出国したら帰国するまで有効である、という旅券だったのです。今では珍しいかもしれませんが、当時は珍しくありませんでした。つまり、旅券さえ持っていれば何年いても構わない。縦長で、黒い本革の、30ページ以上もあるようなつくりで、表紙には金文字で「日本国旅券」、あるいは「日本国」と書いてあったのでしょうか、とても立派な旅券でした。それを持って出て、結局、東ベルリンに入るつもりは本来なかったにもかかわらず、一夜トランクを担いで、西ベルリンのホテルから一人で東ベルリンに入りました。ブランデンブルク門を、夜の闇を通過して抜けていったことを今でもよく思い出します。どうしてそういうことになったのかについては、当時かなり話題になりましたし、「ああ、下村由一というのはけしからん男だ」というような話も随分出ましたが、深くは申しません。

いずれにしても、要するになぜベルリンに行ったかということについては、とりたてて長期的なプランも、何らかのツテも、ほとんどなしに行ってしまったのです。それは1960年9月のことです。その頃は、東ドイツのほうから逃げ出す市民がたくさんいました。だから、私が西ベルリンを出発する前に、友人から、「お前、みんな東から西に逃げてんのに、お前ひょっとして西から東に逃げるんじゃないのか。東に逃げるんじゃないぞ」といわれたのですが、それをやってしまいました。それで実は周りの人にはずいぶんと迷惑をかけてしまいました。そんなことで、決して東京から出発してヨーロッパにまっすぐ行ったわけではないんです。私は、1960年8月に出発しましたが、当時はやっとならぬジェット旅客機が長時間飛ぶようになった

ばかりでした。円が1ドル360円という固定為替制度の時代で、旅行するのにドルなど持つことができません。かろうじて何ドルかを持っていくことは認められましたが、それだけでは足りない。それで、エピソードとしてお話しすると、闇ドルで50ドル、せめて50ドルは欲しいと考えました。そこで、知り合いの知り合いを通じて帝国ホテルに勤務している人に「50ドルばかり、何とか貸してもらえないか」と聞いたたら、「とてもとても無理だ、50ドルなんて無理です。5ドルか10ドルが限度だ」といわれました。そういう時代でした。だから、ろくにお金もないまま、出かけてしまったのです。

要するに、私は、日本ではドイツの運動史、なかでも第二帝政期のドイツ社会民主党（SPD）のことなどを研究しておりましたから、特に19世紀から20世紀初頭にかけてのドイツ労働運動を調べようという思いはあったにしても、具体的な研究計画などはまるでないままに、とにかく東ドイツ、社会主義という国家あるいは社会に入って、社会主義の現実を見たい、この身で体験したいという思いがまずあって、それなら私にとって身近な存在である東ドイツに行こうと、出先で急に思い立ってしまった。それで本来予定になかった行動を取って東ベルリンへ入ってしまった、というのが本当のところでは。

このとき頼っていったのが、東ドイツ在住のプトリッツという人物でした。元ユンカーの末裔で、フルネームは、ヴォルフガング・ガンス・エードラー・ヘル・ツウ・プトリッツ（Wolfgang Gans Edler Herr zu Putlitz）という長い名前でした。彼は、うちはマルク伯領では、ホーエンツォレルン家よりもはるかに古い家柄だ、などというような人物で、プトリッツという町がありますが、そこにいくと殿様のような扱いを受けていました。プトリッツは、もともとナチ時代には外務省に勤めていた外交官でしたが、途中で、ナチスをいわば裏切って、外交官を辞めてしまったという経歴を持っていました。その彼の手記を1960年当時、私が翻訳していたこともあって——これは、さまざまな経緯からペンネームで、みずず書房から出したのですが<sup>(1)</sup>——、プトリッツを頼って、東ベルリンに行きました。そして、プトリッツを通じて、ベルリン・フンボルト大学の日本学で、共同研究員というかなりあいまいな肩書きで、仕事をすることになりました。

## 第2節 東ベルリンでの日常

最初、私は、フリードリヒ通り駅から北にいったらオラーニエンブルク通りを少し東に進むとトゥホルスキー通りとぶつかる角のところ、オラーニエンブルク通り69番地の下宿に、間借りをしました。このオラーニエンブルク通りというのは、現存する通りで、今では観光スポットの一つになっていますが、当時はフリードリヒ通りから折れ曲がって片側は何もない廃墟が延々と続くという有様で、トゥホルスキー通りの角に三軒ばかり建物があり、その角の建物の6階に下宿いたしました。そのすぐ斜め向かいには今もある金屋根のシナゴークが建っていま

した。

かつてオラーニェンブルク通りは、弁護士、医師、大学教授など<sup>ゲノーベナーミッテルシュタント</sup>富裕な中間層の人びとが住んでいた通りであったようで、そこに残っていた建物も、外はぼろぼろなのですが、内装の方はなかなか立派で、床は板張りの20畳くらいの広々した居室に間借りしました。そこに下宿して最初に驚いたことは、ラジオを買いに行ったら、電器店で直流か交流かと聞かれたことでした。慌てて下宿屋に聞きに行ったら<sup>ヴェクセルシュトローム</sup>交流だとのことでした。後で調べてみると、すでに19世紀末から20世紀初頭にかけて電気が通じていたのですが、小さな電力会社がベルリンには林立し、勝手に電気を送っていたというのです。それで、直流と交流が入り交じっていたようなのです。オラーニェンブルク通りには、18世紀の建物も残っていて、さらに面白いことに、街灯がガス灯で、いつもジージーという音がしていました。しかしこは、玄関を出るとすぐにSバーン（市内電車）の地下駅があって、それこそ傘なしですぐに電車でどこにも行けるといった交通の利便性がありました。大学にも近くて、歩いて10分くらいのところで、そこに1年足らず住んでいました。

### 第3節 壁の建設に遭遇して

1960年9月に住み着いて、その間の話は省略しますが、1961年8月13日に東西ベルリンの交通が遮断されることになりました。これがベルリンの壁の建設です。この日は日曜日で、朝からよく晴れていたことを覚えています。まずラジオをつけて、西側のニュースを聴きました。もちろん『<sup>ノイエスドイチュラント</sup>新しいドイツ<sup>(2)</sup>』紙も取っていましたが、それだけではどうしようもないので、西側のラジオを聴いていました。一つはリアスベルリンというものです。リアスというのは、米軍占領地区放送というラジオ局の略称です<sup>(3)</sup>。それからもう一つ、<sup>ゼンダーフライエスベルリン</sup>自由ベルリン放送<sup>(4)</sup>の報道局がありまして、そのニュースも聴いていました。ラジオをつけたとたんに、大騒ぎをしている。それですぐに、ブランデンブルク門まで飛んでいきました。歩いて15分ぐらいです。その瞬間はまだ規制がそれほど厳格ではなかったので、東から西へ行ったり西から東へ行ったりしながら、写真を撮ったりしました。ちょうどブランデンブルク門の西側に、東ドイツの武装組織といいますが、<sup>ベトリープスカンフアグルッペ</sup>経営戦闘班の中年の男性らが古いソ連製の丸い弾倉のついた自動短銃をかかえて、ずらっと並んでいる。ソ連製といってもカラシニコフではなくて、第二次世界大戦でソ連軍が使った兵器です。最初に前面に出てきたのは、軍隊ではなしに、武装した労働者ということになるわけです。私は写真を撮りましたが、その後撮った人たちは、写真機を没収されていました。ただ、私が撮った写真をベルリンまで富永幸生君（元青山学院大学教授）が来たときに見せたら、みんなぶれていてだめだ、といわれました。

東西ベルリン間が封鎖されるという兆候はあったかといいますと、私自身、もちろん周りでもほとんど感じることはできませんでした。ただ、壁ができる直前の時期には、確かに、やた

ら西へ逃げ出す市民が多かったです。たとえば、歯医者に通っていると、次の週の予約日にはもうその歯医者がないし、学生仲間でも、昨日までゼミで隣にいた人が、今日はもう来なくなって、下宿に行くと、姿形がみえない。次から次へと身の周りの人間がいなくなってしまうんですね。これは、非常に不安な状態でした。自分が通っている医者がある日突然いなくなったと思えば、自分が通っている店もある日なくなってしまう。これではもう不安な気持ちが募るばかりで、この先どうなるんだろうという不安が、周りで日に日に色濃く立ち込めていくような傾向はあったと思います。それでも、まさか壁が出来て、封鎖されてしまうなどということは、私の周りでは誰も思ったりしなかったのです。

同じ頃、日本には総評（日本労働組合総評議会）という組織がありました。当時の日本では、組織労働者が全国で500万とか600万もいるといわれていましたが、その親玉が総評でした。一時は、国際的にも一定の発言力を持っていましたが、その総評から派遣されてきて東ドイツに1年間滞在していた特派員の竹村英輔君は、実は壁建設当時、ベルリンにはいなかったんです。彼は非常に優秀な人物で、後にグラムシの研究者になったのですが、こういった外国から来ていたジャーナリストが、何らかの口実でその日ベルリンにはいない、という手筈が整えられていました。当然、総評から来ている特派員と向こうの労働組合の本部とはしめし合わせているわけで、今日、明日は、「どこどこでイベントがあるからそっちの取材にいいおいで」といわれ、前日からベルリンを離れている間に壁ができてしまったのです。だから実行するほうはかなり周到な準備で、ことを進めていたんだと思いますが、それが漏れることはなかったのです。そういうわけで、東ドイツに定住していた日本人は、私の知る限り3人くらいいたのですが、8月13日に東ベルリンにいて、いわば閉じこめられてしまった日本人というのは私1人でした。こうして、あっという間に東に閉じこめられてしまいました。

#### 第4節 可視化される境界線

壁ができて、突然、ここから先は行けないよ、といわれることになりました。これは非常に大きな変化でした。というのも、それまでは散歩をすると歩いているうちに西に出て、知らないうちにまた東に戻るということがよくあったからです。壁ができるまでは、東西の境界がよく見えなかったのです。しかし先ほどいったように、私の住んでいた玄関の目の前にSバーンの地下駅があって、8月13日には、その駅の入り口に兵隊が立っていました。Sバーンは閉鎖だといわれた。つまりこのSバーンは使えないということになったのです。ポツダム広場からしばらくシュプレー川の方に来て、北へ抜ける。つまり、西ベルリンから東ベルリンの地下を通過して、西に抜ける線でした。この地下鉄は8月13日以降も運行されていたのですが、私の下宿先のすぐ目の前にあった駅も、朝起きてみたら封鎖されていました。つまり、ベルリンが封鎖されてもこの列車は依然として通るのですが、東ベルリン内はノンストップで行って

しまうことになりました。その路線の東ベルリン域内の駅は全部閉鎖されて、使えなくなってしまったのです。だから、西ベルリンの市民は、その地下をごうごうと通ってだけで降りることはないですし、東ベルリンでは、<sup>ガイスターバーンホーフ</sup>幽霊 駅 ができてしまいました。

これには正直、困りました。私は当時、ポツダムの<sup>アルヒーフ</sup>文書館に通っていたのですが、8月13日までは西ベルリンのSバーンで、フリードリヒ通り駅から直通でポツダムまで行けたんです。文書館はツェツィーリエンホーフから近く、Sバーンからも近いところにありました。さあ、どうするか。遠回りして行かなければならなかったのが、ポツダムまで2時間くらいかかるようになりました。ついでにいうと、東ベルリンからポツダムまで行く直通の列車が遮断されたために、急遽、西ベルリンを迂回する通勤列車ができました。これが「スプートニク」という名前の列車で、ちょうどガガーリンが宇宙を飛んだ直後の話ですね。

もう一つ、壁が建設されたことで、東西の境界がはっきり示される象徴的な出来事がありました。先ほどお話したように、わたしはその頃、西ベルリンとの境界線に比較的近いところに下宿していましたので、毎晩夜になると、機関銃の音がよく聞こえるようになりました。平和な日本に住んでいる現在の私たちは、戦車が走るときどんな音がするか、なかなか想像できないのではないのでしょうか。私は、まさに本物の戦車が街を走る、そして町中に機関短銃という小銃を構えた人々が溢れているという体験を、東ベルリンで、良くも悪くも初めてすることができました。面白いことに、アメリカのシャーマン戦車が、まっすぐの通りが東西で分断される地点——西側で後に有名になる「チェックポイント・チャーリー」——で、堂々と通りの真ん中に出てくるんです。そして、その戦車の大砲の先端がちょうど境界線の上に行くように出てきました。でも、そこから先は一ミリも東側には入らないようにしていました。これに対し、ソ連の戦車は、表通りではなしに裏通りに身を潜めて待っていました。そういう構図がありました。

## 第5節 一般市民の反応

一般市民は壁の建設をどのように受け止めたのでしょうか。私は、市民も大きな衝撃を受けたといって差し支えないと思います。私が覚えているのは、封鎖された日だったか、あるいはその直後だったと思いますが、年配の女性が街を歩きながら、<sup>イエフット コムト ダス ディック エンデ</sup>えらいことになったな、と独り言をつぶやいていたのです。ですが、一般市民は、決して歓迎はしなかったにせよ、人間というものは習慣の動物で、新しい状況に慣れるものなのだと、つくづく思いました。金魚鉢に入れられた金魚はガラスにぶつからないように泳ぐのをすぐに学習するのと同じように、人もすぐに新たな環境になじむようになるのです。つまり、壁ができるようになって——、もちろん一夜にして壁が出来たわけではなく、壁が出来るまで十分時間がかかるのですが——、最初は封鎖されて、市民の生活がどう変わったかという、一番大きいのはやはり、先ほど申し

上げたような、ある日突然身近な人がいなくなってしまうという不安な状況が壁のおかげで解消されたのです。これは非常に大きなことでした。もちろんその代償もまた非常に大きかったわけですが、しかしやがて市民生活の中に、諦めに基づくものだったかもしれませんが、ある種の落ち着きが出てきました。ですから2、3ヶ月もするともう多くの人びとは新しい環境に慣れてしまっていました。

一方、外国人は、封鎖後もほとんど自由に東西を往復することができました。その規制は2年、3年と経つうちにだんだんと厳しくはなりましたが、最初のうちは、本当に自由に、外国人は西に行くことができました。というのも、東西ベルリンの交通は、一般市民にとっては遮断されましたけれども、ベルリン全体は、依然として四ヶ国統治のもとにあったからです。これは後の「再統一」まで変わりませんでした。いわゆる四大国の外国人は自由に移動できて、もちろんアメリカ軍のジープも自由に東に入ってくるし、ソ連軍も西に入っていました。連合軍の交通の自由は保障されているという非常に奇妙な状態がありました。そういう意味でベルリンは、かなり特殊な条件の下に置かれていたことがわかります。特徴的なのは、1961年、あるいは1962年、1963年になってもそうでしたが、一般市民は、たとえば東ベルリンから、ライプツィヒ、ドレスデンなど、東ドイツの他の地域に行くことを、「<sup>イン・ディ・レプブリーク</sup> 共和国<sup>ファーレン</sup>に行く」と表現していたことです。つまり、彼らの意識の中では、東ベルリンは共和国の中に入っていないんですね。はじめは非常に奇妙な感じがしたんですが、これが、一般市民の感覚だったのだと思います。

## 第2章 中ソ論争の展開

### 第1節 中ソ論争の舞台裏

次に、私が中ソ論争の舞台裏にどう関わっていくかということについて、お話したいと思います。1961年11月、ライプツィヒで出版印刷関連労働組合の国際協議会というものが開かれました。これは出版印刷労組関係では初めての国際会議のようでしたが、ここに日本からの代表団もやってきました。その大会の枠内で「平和と民族独立のための決議」を採択しようと、その草案をあらかじめ、日本代表の一人だった小野塚敬一さん（全印総連）が日本から用意してきていました。ライプツィヒで開かれた同大会名で決議が採択されることになり、その決議の準備のための小委員会が開かれました。その小委員会は第2決議の小委員会と呼ばれたのですが、そこには、日本、ソ連、イタリア、フランス、東ドイツからの代表が出席していました。この小委員会で、小野塚さんが、日本から用意してきた草案を提案したのですが、これに対して、侃々諤々の議論が始まってしまいました。内容はよく覚えていませんが、私はせっせと翻訳していました。

小野塚さんがその小委員会の議長を務めていたのですが、まずイタリア代表がこれに強行に



反対しました。しかし論拠や反対の理由はまったくわからないのです。私の偏見かもしれませんが、イタリア人はしばしばこういう会議で物事を真正面からとらえるのではなく、ヴァイトヘアゲホルト遠回しとといいますか、何が焦点かわからないけれども、とにかく反対していることだけは確かなのです。何時間やっても変わりません。休憩をはさんで、昼過ぎからまた始まりましたが、休憩をはさんでやっても、いっこうにわかったとはいわない。イタリア代表は、元パルチザンの闘士で上院議員の女性でしたが、この人が強硬に反対しました。フランスも反対していました。東ドイツはホスト役ですから、非常に気に病んで、賛否の立場を明らかにしないのですが、諸手を挙げて賛成というわけではなかった。ソ連代表は一言もいわない。小野塚さんはほとほと手を焼いて、休憩時間にお茶を飲みながら、ソ連代表に、イタリアはなぜ反対するのか、フランスはなぜ気に入らないのかと聞いてみました。ソ連代表はそれに対しても一言もいわない。これはいったいなんだ、という話になります。結局、この小委員会は夜を徹して続き、これは小野塚さんの粘り勝ちですが、パラグラフを多少削ったりしたのだけれど、順序をぱっとかえて出したところ、さすがのイタリア代表もソファーにひっくり返っていて、もうしょうがない、わかったといって、翌朝9時になってようやく決着しました。私は後にも先にも徹夜で通訳したという経験はこれ以外にありません。

## 第2節 平和共存というイデオロギー

1961年には議論が硬直していたことの意味ですが、これは、あとになって私自身、わかったことですし、小野塚さんもそのときはわかっていなかったと思います。なぜイタリア、フランスが強硬に反対し、ソ連が援護射撃をしないのか。ところが当時何が起きていたのかを振り返ってみますと、いろいろな事情がかなり鮮明になってきます。つまり1961年にはすでに、ケネディが新たにアメリカ大統領に就任していました。フルシチョフは、このケネディを、平和の友であり、理性派の代表だとみなして、いわゆる資本主義体制と社会主義体制の平和共存の路線を追求するようになりました。この頃もうすでにフルシチョフは全面完全軍縮を提案したりもしています。実際、米ソで、軍縮共同宣言を発するということがありました。つまり、この頃すでにソ連をはじめ、1970年代以降はユーロコミュニズムと呼ばれる潮流につながっていくような西ヨーロッパの共産主義者の間では、アメリカ帝国主義という言葉それ自体を忌避する傾向がすでに顕著になりつつあったのだと思います。当時提出された小野塚案にあったように、アメリカ帝国主義こそもっとも危険な戦争の敵である、戦争放火者である、というような、アメリカを正面切って糾弾するような決議は、とうてい彼らの受け入れるところではないということが、後になってようやくわかってきました。

また1961年12月にはモスクワで、世界労連（世界労働組合連盟、WFTU）の第五回大会が開かれています。ここでもおそらく同じようなやりとりがあったものと思われる。ついで



【写真1】 1962年12月下旬に世界労連が主催したある会議で通訳をしている様子。一番手前に写っているのが筆者で、その隣で通訳中の人物が小森良夫氏。(筆者所蔵)

にいうと、このライブツィヒでの会議開催中、本会議で通訳を担当したのは、先ほど言及した竹村英輔君と、その時ブラハに常駐していた小森良夫さん（写真1）でした。あの頃ブラハには米原昶さんや井出洋さん、それに小森さんなど面白い人がたくさんいました。1960年代ブラハ在住の日本人はなかなか面白いですね。ブラハには『平和と社会主義の諸問題』という雑誌の編集局があって、そこに日本共産党の代表者が常駐していました。

それでは、平和共存路線とはいったいどのようなものだったのでしょうか。先にも述べたように、ベルリンのフリードリヒ通りにあった「チェックポイント・チャーリー」からアメリカのシャーマン戦車が待機している状況が西側にありました。一方の東側では、フリードリヒ通りの脇に入った横町にソ連の戦車がありました。つまりこれは、東、西、ソ連、アメリカはお互いにそれぞれの勢力圏を承認しあって、それぞれの勢力圏内で行われることには互いに干渉しない、一步も入らない、ということの意味していたのです。米ソが、特に世界の中心であるヨーロッパを東西に分けて、それを勢力圏として支配する。そしてその支配をお互いに認め合う。それが米ソの平和共存の具体的な意味の一つだったといってよいでしょう。

このように、ヨーロッパの中心部では、米ソは手を握りました。そのかわり、ヨーロッパ以外の、まだ勢力圏が確定するに至っていない地域では、場合によっては武力行動も辞さない、

という二重構造も明らかになっていきます。1961年にケネディが大統領に就任すると同時に、アメリカ合衆国はラオス内戦に介入していきました。1年後の2月には、南ヴェトナムに軍事的な介入も始めています。フルシチョフが理性派の代表と呼んだケネディは、ベルリンでは理性派であったかもしれませんが、ヨーロッパ以外のアジア、アフリカでは決して理性派ではなかったのです。そこをどう理解するかは、非常に重要な問題になってくるように思います。

このような観点からみたとき、ソ連と中国の間の、アメリカ合衆国に関する認識の違いは、簡単にいってしまうと次のようにまとめることができるでしょう。すなわち、ソ連としては、特にケネディに代表されるような理性派がアメリカにいて、これと手を握ることが重要であって、ソ連を先頭に、先進資本主義国の組織された労働者階級が「階級敵」と闘っていく、というのが本来の道筋である。そして、そのためにはソ連を中心とした社会主義圏の経済的、社会的、政治的、そして軍事的な力を強めていくことが必要になってくる、と。それに対して中国の方は、今ももっとも危険な平和に対する敵こそ、アメリカ帝国主義であり、そのアメリカ帝国主義と戦う最前線にあるのが植民地・従属国における民族解放闘争である、との立場をとっていました。要するに、何が主力の戦闘部隊か、あるいは、今や世界的に闘争の主翼を担っているのは誰か、というところで両国の違いがはっきりと明らかになったといえるでしょう。

他にも1961年から1962年にかけて、いくつかの国際会議で同じような経験がありました。一例をあげると国際民婦連<sup>(5)</sup>がそうですが、私もその会議に出席し、同じような体験をしました。そこで特徴的だったのは、中ソの代表が1961年から1962年頃の時点では、会議に出ても一切発言しないということでした。発言するのはもっぱらイタリア、フランス、東ドイツで、彼らがソ連を代表し、かたや日本、北朝鮮、ヴェトナムは中国を代弁していたのです。1962年の10月にはキューバ危機が起きて、その直後にフルシチョフの対応をめぐり、中国共産党が公然とソ連指導部を批判しました。中国にしてみれば、フルシチョフは日和見主義者だというわけです。

こうして中ソ対立は表面化し、まもなく中ソ対立が全面的に始まりました。たとえば、1963年1月に社会主義統一党（SED）第六回党大会が開催されたときのことです。寒い年で、ベルリンでは零下十数度まで下がったように記憶しています。すると東ドイツでは川が凍って、石炭の輸送が不可能となり、電力不足に追いやられました。不要不急の機関は閉鎖され、大学も閉鎖されました。寒い中、1963年1月に党大会が開催されました。東ベルリンに世界のメディアの関心が集まっていたといってよいでしょう。理由は中ソ対立が全面的に噴出したからでした。ここにはフルシチョフ、カストロ、チャウシェスクが列席していて、私も通訳を務めました。フルシチョフと握手もしました、などといっても、いまだき、誰も感心してくれませんが、チャウシェスクもすぐ近くにいました。ひな壇には錚々たるメンバーが並んでいました。この席でフルシチョフが長広舌を振るっていました。原稿はあらかじめもらっていましたが、フル

シチョフは無視して演説を続けました。演説が加速してもうしまいには通訳不能に陥りましたが、とにかくフルシチョフへは拍手喝采で、中国へはブーイングが起きました。まったく対照的でした。こんなふうにして、私は、ソ連と中国の決別が演出された瞬間を目撃したのです。

### 第3節 社会主義経済体制の構築に向かって

中ソの対立点は、アメリカの役割評価と平和共存の問題にとどまりませんでした。もう一つ大きな論点として、1963年の「新経済政策」がありました。すなわち、社会主義経済における利潤概念の導入の問題であり、いわゆるリーベルマン論文<sup>(6)</sup>を皮切りに広く議論されたものでした。この社会主義経済体制の利潤概念・報奨金を最初に組織的に導入したのが東ドイツだったと思います。事実、先に述べたSEDの第六回党大会で利潤概念・報奨金が導入されています。これは、要するに、我々は社会主義の基礎の建設を終えた、だから、これから社会主義の包括的建設を始める、という考え方です。そしてその前提として、東ドイツではいまや、社会主義的生産関係が勝利した、と謳われました。これは、一つは農業の集団化が終わった、という理解に基づいていました。もう一つは、中小零細企業の全面的な、事実上の国営化の完了を意味していました。

さらに、これらのことと同時に強調されるようになったのが、商品の価値法則の全面的展開と労働者への物質的刺激の導入です。これはソ連共産党の基本的な方針をそのまま受け継いだ形のもので、ウルブリヒトは、「社会主義経済においても、商品が存在する限り価値法則は働く」のだから、その価値法則を全面的に展開させていくことこそ、社会主義建設の具体的な形であると説明しました。具体的には、それまで国営企業は生産目標の設定と同時に、それに必要な労働力・原料を割り当てられてきましたが、1963年以降はそれがなくなりました。いまや、各国営企業の独立採算制が認められることになり、人民所有企業は自力で労働力と原料を調達しなければならないことになりました。その推進力として、生産効率を上げれば、その見返りを物質的に与えるという方法が採用されたのです。物質的な刺激、すなわち、よく働いて効率をあげた人には報奨金が与えられました。第六回党大会では、こうしたやり方を梃子にした経済運営が打ち出されたのです。

それもそのはずでしょう。これは本当に笑い話としてあるのですが、1940年代から1950年代かけての社会主義的な生産体制の下では、例えば靴を生産するにもノルマがあって、何足作らなければいけないと計画されるから、靴をとにかく作りました。ところができてみたら、数は揃ったけど、左側の靴しかない、というような話があったからです。これではもうどうにもならないだろうと考えられた末に商品の価値法則が登場してきました。経済学的にみると、商品生産というのは、資本主義社会だけではなく、資本主義社会以前、原始社会にも封建社会にも商品生産というのはあった、だから社会主義の下でも商品生産というのは当然あるんだ、と

いう理論展開です。しかし、このような経済政策を中国共産党は修正主義といって厳しく批判しました。

ところで、1963年の「新経済政策」は、正式には「国民経済の計画と指導の新しい経済体制 (Das neue ökonomische System der Planung und Leitung der Volkswirtschaft)」と呼ばれたものでした。この言い方で私が特徴的だと思うことの一つは、「新しい経済システム」という表現を用いていることです。このSystemという語は「体系」と訳して良いと思いますが、こういう場でSystemという概念を使うことは、それまでの東ドイツでは考えられなかったのではないかと思います。つまり、ちょうどこの頃、「サイバネティクス」の導入が始まって、それとともに至る所で、Systemという概念が使われるようになりました。Systemとは何なのか、はっきりとはわからないのですが、ある完結したプロセスの中で、Systemという言葉は使われるのだらうと思います。絶えず発展するプロセスについては、Systemという概念は本来そぐわない、なじまないと思うのですが、ここではあえて、Systemという概念を使うことによって、ある種の固定化された経済体制を示唆しているのではないかと。つまり、1963年以降、経済学を含めた東ドイツの社会科学に、それまでになかった新しい思考パターンが導入されてきたといえるのではないかと思います。

具体的には、この頃、それまで公的にはほとんど日の目を見ることのなかった社会学 (Soziologie) が、一定の範囲で復権してきます。それから、今もよく記憶しているのですが、同時期の日本でも、あるいは国際的にも広く、「科学技術革命」ということが喧伝されました。この「科学技術革命」という概念が、この新しい経済体制の導入を支える一つの柱になっていたように思います。とくに電子的な技術をいかに我がものにするかが、社会主義経済の発展にとって重要な鍵であるとの認識が生まれていました。1964年には、『新しいドイツ』紙の一面に東京の首都高速の脇を新幹線が走行する写真が掲載され、「エレクトロニクスの勝利」との見出しが躍っていました。この頃から私の方にも、日本の技術文献の翻訳依頼が舞い込むようになりました。例として、日本からは、2001年に亡くなった芝田進午という人が、わざわざ呼ばれて講演する、あるいは芝田氏の書いた本がドイツ語に翻訳されるということもありましたし、実際に私が翻訳しました<sup>(7)</sup>。つまり「科学技術革命」という、それまで社会主義陣営の中ではほとんど顧みられることのなかった概念がここで新たに導入されてきたのです。

このような経済政策が導入された1963年以降は、ベルリンに住んでいる限り、生活は比較的安定し、日用品に不自由はありませんでした。高級食料雑貨店では西側商品エクワイジートラデンがそれなりの価格で購入可能となりましたし、生活の中身が豊かになって、多様性が広がる実感もありました。一般市民のなかには、閉じこめられたことへの不満、自由のないことへの不満もみられましたが、壁によって生活が安定したという印象も否定できないでしょう。そうした状況のなかで、私は、オラーニエンブルク通りからフリードリヒスハインへ引っ越して、ベルザーリン通り<sup>(8)</sup>

の一人暮らしの女性の家に部屋を借りることとなりました。大家さんは、住居下の大通りに面した小さな電器屋を営っていました。個人経営の店舗も残っていたんですね。土産物屋もしかりです。部屋代は60マルクでした。その女性は新聞を読まず、もっぱら西ベルリンのテレビをみていました。意識としては西ベルリン市民と同じで、ケネディ暗殺時には涙を流したのです。決して例外的な存在ではありません。西側テレビを規制することなどできなかったのです。日本からはザ・ピーナッツが来訪しました。その頃、市民の間によく聞かれたのは「1935年から36年頃の暮らし向きが一番良かった」という声でした。安定した東ベルリン市民の生活があった反面、その代償として、ヴェトナムでの悲惨な事態が起きたといえるでしょう。ヨーロッパの安定、それ以外での流血の事態。東ドイツ、ソ連のヴェトナム戦争への対応は、国連で解決すべきとの考えに規定されます。でもそれは、中ソの立場は大きく異なっていたなかでは不可能な話だったのです。

このようにみえてきますと、1963年にいわゆる「新経済政策」が導入されて、東ドイツ国内の経済発展の一定の基礎ができたということがわかります。それと同時に、そのような経済政策を保証したのは、一方で1961年のベルリンの壁構築だったのですが、他方で、フルシチョフ、ケネディ、米ソ両首脳による、ヨーロッパにおける二つの体制の平和共存という大きな世界政治の枠組みが、まがりなりにもできあがったことでした。つまり、少なくともヨーロッパについては、戦後の過程でできあがってきた東西の境界を双方が認め合って、互いにその境界の相手側で起こることには干渉しないという、いわゆる平和共存の体制ができあがったのです。しかし、それはヨーロッパ以外での、とくにヴェトナムを中心とする武力衝突を排除するものではありませんでした。むしろ、それがヨーロッパにおける平和共存を補完する形で進行していたといえるのではないのでしょうか。

### 第3章 社会主義ネーション論の展開

#### 第1節 東ドイツにおける国民文化の醸成

1962年6月、ドイツ国民戦線全国大会で「DDRの歴史的任務とドイツの将来」が採択されました。これは国民的文書ナツィオナルドクメントと呼ばれて、メディアで喧伝されたものですが、1962年、63年段階の自己規定における東ドイツの位置を考える上で重要です。すなわち、ウルブリヒトが主導した路線であり、それによると、ドイツ・ブルジョワジーはドイツの国民的な本来の任務を放棄し、今やそれを担うのは東ドイツに結集した労働者・勤労者階級である、それゆえに東ドイツにこそドイツの国民の使命ナツィオナールデアウフガベがある、というわけです。ドイツ国民に対する東ドイツの責務という考えをウルブリヒトは最後まで堅持しました。本来19世紀にブルジョワジーが果たした役割をいまや労働者階級、すなわち東ドイツが担うのだと主張したのですが、これは端的に言って、「一つのネーション、二つの国家」の考えに基づくものでした。遠い将来で

あれ、いつか国家連合を通してドイツ統一をめざすという考えの下、ウルブリヒトは、東ドイツ経済運営の効率化をはかり、経済的な実力を蓄えていこうと計画していたのです。

このような状況の下で、東ドイツ市民の意識を高める教育が行われていきました。いわば、東ドイツは国民文化を形成しようとしたといってもよいと思います。たとえば、1960年代半ばから後半にかけて、とくに我々にとって関心が深い歴史学や関連分野でいいますと、次々に基本的な文献が刊行されていきました。一つは、600頁ぐらいいある『ドイツ史年表<sup>(9)</sup>』や、それと同じ体裁の『世界史年表<sup>(10)</sup>』といった社会科学のスタンダードワークが次々に整備されていきました。また、8巻本で規模は小さいのですが、百科事典が作られました。マイアー-Meyerという名称の8巻本の百科事典で、マイアーといえば、19世紀からずっと刊行されている大きな百科事典と同じ名前ですが、そのミニ版といえます<sup>(11)</sup>。これはまだ私の手元にあります。それから、ちょうど1960年代半ばには、『ドイツ人民の歴史叢書 (*Beiträge zur Geschichte des deutschen Volkes*)』という、大学レベルのドイツ史概説書のシリーズが次々に刊行されました。そして、『ドイツ労働運動史 (*Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*)<sup>(12)</sup>』という8巻本がやはり1960年代半ば以降にできて、それに合わせた形で『ドイツ労働運動史年表<sup>(13)</sup>』や人名事典、その他基礎文献が着々と整備されてゆくことになります。それから1965年から1968年にかけて、『ドイツの歴史 (*Deutsche Geschichte*)<sup>(14)</sup>』という大判の3巻本が、一般市民向けに出版されました。第1巻が原始社会から1789年のフランス革命までで、第2巻がフランス革命から1917年までを扱っていて、第3巻は1917年から現代までという構成でした。それから、1950年代末から、ドイツ史の教科書が出版されていて、やはりこれも原始社会から現代まで全部を扱っていて、私の手元には12巻までしかないのですが、たぶんもっと出ているはずだと思います。だいたい、1960年代にはどれもほぼ完結しているので、少なくとも、雑誌の形をとって、市民向けの歴史叙述が整ってきたのが、1960年代であったといえると思います。

ここで描かれた歴史はどんなものだったのかというと、一言でいってしまえば、東ドイツはドイツ国民の最良の部分を代表し、具現しているのだ、という主張につきるでしょう。つまり、ドイツ史のなかの、進歩的で、人道主義的で、民主主義的な伝統を受け継いだのは我々で、それに基づいて新たな国民文化をここで実現しつつある、というのです。これが原始社会から描かれるとどうなるかは、ちょっと疑問ですが、具体的にはドイツ農民戦争から始まって、やはり18世紀のカントやヘーゲルによって代表されるドイツ観念論や、ゲーテ、シラーによって代表されるドイツ文化などを受け継いでいるのは、我々なのだ、と論じていたのです。もちろん19世紀の統一と自由の運動を受け継いでいて、1848年のマルクス、エンゲルスの社会主義の伝統を礎にしているのも我々ドイツ民主共和国である、という話でした。

このように、東ドイツで歴史や文化に関する東ドイツのスタンダードワークが整備されて

いったわけですが、当時、友人の富永幸生君が「なかなか結構なことだが、こうやって基本文献ができるのは、どういう意味なんだろうな」といいました。つまり富永君は、あるできあがった歴史観に基づいて、スタンダードワークが整備されてゆくこと自体は結構なことであっても、そういった固定された歴史観が整備されることによって、それとは異なる見方が排除されてゆくことになる、ということをこういう表現で警告したのだと思います。確かにその通りだと思います。そうした矛盾をはらみつつも、我々にごく身近な文化的な生活の面で、一定の充実がはかられていったというのが、1960年代の東ベルリンで暮らしていて、私が直接体感したところでもあります。

## 第2節 文化的生活の充実

文化的な生活面での充実は文学、演劇の領域でも図られました。とくにベルリンでは、もともと演劇が非常に盛んで、東ベルリンだけでも、当時の大きな劇場としては、国立オペラ座 (Staatsoper) とコーミッシェ・オーパー (Komische Oper) の二つがありました。また、演劇ではドイツ劇場 (Deutsches Theater) とカンマーシュピーレ (Kammerspiele)、フォルクスビューネ (Volkstheater), そしてマクシム・ゴーリキー・テアター (Maxim Gorki Theater) と大きなもので四つ、常時上演する劇場がありました。それから、プレヒト劇場——彼の創立したベルリナーアンサンブル劇場 (Berliner Ensemble) ——を加えると五つですね。ドイツ劇場では古典的作品の上演が多い。カンマーシュピーレはあまり行ったことがないのですが、プレヒト劇場ではプレヒトのものを中心に上演していました。それからマクシム・ゴーリキー・テアターと、ローザ・ルクセンブルク広場 (Rosa-Luxemburg-Platz) にあったフォルクスビューネ——これは伝統的な民衆劇場ですが——は、東ベルリンの劇場のなかでも充実した上演内容で、とくにコーミッシェ・オーパーなどは国際的にも高い評価を受けるようになっていました。

それから、市民にとっては目に見える直接の変化だったと思いますが、スポーツ面での東ドイツの活躍もありました。壁ができる頃まで、東ベルリンでは、スポーツの国際試合は行われたことがありませんでした。これはなぜか。一般市民の言い方によれば、「東ベルリンで国際試合をやると、東ドイツのチームが市民から罵倒されかねない、だから国際試合はできないんだ」というわけです。それが、壁が建設されてしばらくして1960年代半ばになると、東ベルリンでもスポーツの国際試合が行われるようになり、そこでは、それほど熱狂的ではないけれども、東ドイツのチームに対する市民の応援がみられるようになりました。壁ができることによって、それなりに、相対的に、市民生活の安定が経済的な面のみならず、社会的にも文化的にも保証され、一定程度の充実をみることになりました。そしてさらにいえば、西側とは違ったもう一つの、あるいは真のドイツ国民の文化が追求されていったように思われます。



ちょうど1964年か65年ぐらいのことだったと思いますが、ベルリンの目抜き通りのカール・マルクス・アレー Karl-Marx-Allee を、日中ウルブリヒトが、もちろんお伴を引き連れて、市民と接触するように歩く姿を何度か見かけたことがあります。これも、それ以前だったらおそらくなかったことだと思います。

もちろん、私が暮らしていたのはベルリンで、それ以外の都市に住む市民の生活がどうであったかはわかりません。まだまだいろいろ問題はあったらと思う。私の知り合いには、1960年代のドイツではひどく不自由な思いをしたという人もいます。ですから、私の見聞はあくまで東ベルリンという枠の中のことでありと申しておきましょう。

### 第3節 ヴィッツの文化

私自身はそれほど直接一般市民から聞いたことはないですが、少なくともインテリの間では、ある種の政治的な<sup>ヴィッツ</sup>冗談が絶えず語られることが、1960年代前半頃までの生活の重要な要素となっていました。たとえば1960年頃のヴィッツで、よく記憶しているものがあります。これはおそらく西から流されたものだと思いますが、ドレスデンの或るレストランでは、「お客様のご注文に応じて、どんな料理でも当店では用意いたします」という触込みで話は始まります。あるときこの店にとある客がやってきて、「では一つ、ゾウのシュニッツェル（カツレツ）を頼む」というわけです。ですが、待てど暮らせど料理は出てきません。その客は、「なんだ、看板に偽りありじゃないか。ゾウのシュニッツェルもできないのか」と文句をいって見た。そしたら、店員が、「いや、ゾウのシュニッツェルはできるんですが、肝心のジャガイモがありません」と応える、というものです。ちょうど1960年頃の東ドイツは、非常に危機的な経済状況で、ドイツ人にとって日常欠かすことができないジャガイモですら不足しがちであったことを皮肉ったヴィッツなのです。

もう一つのヴィッツもやはりちょうど1960年代初め頃のもので、ハンスが友人に向かってこういいます。「君はベルリンの壁が開いたらどこへ行くかい？」と。ですから、この話は1961年以後のものですね。すると、友人は、「俺ならもうロストック（Rostock）まですっ飛んで行き。」と答える。ロストックといえば、ベルリンから数百キロ離れた海岸地方の都市です。それでハンスは、「なんでまたロストックまで行くんだい？」と聞き返すと、その友人は、「開いたとたん、あっという間に行列ができるから、その尻尾はロストックぐらいまでつながっちゃうからだよ」というヴィッツです。

もう一つ、私が記憶しているのは、ドイツ労働組合の代表が北京に行ったヴィッツでしょうか。この代表は北京で長々と演説をします。15分くらいしゃべって、そうすると通訳がストップをかけて、「シュン」という。また長広舌をふるって、15分しゃべった。そしたら今度は通訳が「チャン」という。そして、もう一度また長々としゃべったら、通訳が「チュン、チャン

チュン」といった。終わってからこのドイツ人は、「俺は長々としゃべったが、あの通訳はひどく短かった、通訳はなんていったんだ?」と聞いてみた。すると、最初の通訳は「彼はしゃべっている」。二回目は、「彼はまだしゃべっている」。三度目は「終わった」といったのだ、というわけです。これはつまり、東ドイツに限らないでしょうけれども、共産党や労働組合の幹部が、長々と決まり文句を並べ立てる演説が得意だというヴィッツですね。

それから、その頃あったのは——これはドイツ語でいわないとわからないんですが——„Die Bewegung besteht in Sitzung“ というもので、つまり「運動の本質は座っていることにある」という意味です。Sitzung は座っているという動詞 sitzen の名詞で「会議」という意味です。だから「運動は会議だ」、「Bewegung は Sitzung だ」という矛盾した言葉を使っていて、つまり実際には全然動かずに座ったまま会議ばかりしているという皮肉をいったヴィッツがありました。

このように、ヴィッツというものは、おそらく抑圧体制下のとくに知識人が求めたのだらうと思います。ですから、「おい、近頃なにか面白いヴィッツを聞かないな。何かないか?」というのが、知識人の間で、仲間と出会った時のあいさつ代わりに言葉でした。壁の前後は秀逸といえますか、なかなか面白いものも多かったのですが、1960年代後半以降は、あまり深刻なヴィッツは流布されなくなったような気がします。これは、一程の安定が得られたことの証しだったのではないかというふうに思います。

#### 第4節 社会主義ネーションか、ドイツ・ネーションか

1960年代末頃になると、東ドイツの自己認識にとって非常に重要な変化が起こってきました。すなわち、1968年から1969年にかけて西ドイツでおきた政治的・社会的・文化的な大きな変動です。ご承知の通り西ドイツでは、1969年に、それまでのキリスト教民主同盟の政権から大連合政権に変わり、やがてSPD政権が生まれてくるという政治的な変化が起きていました。それと同時に起こったのが、ヴィリー・ブランド（Willy Brandt）によるポーランド西部国境の承認です。そしてポーランドへの謝罪です。東ドイツとしては、なかなか微妙な問題として認識されたのですが、いわゆるドイツとポーランドのオーデル・ナイセ国境線を西ドイツが承認し、ポーランドとの良好な関係を築くことに成功するという、あの一連の政策です。

そうなる、東ドイツとしてこれにどう対応してゆくのかという問題がやはり浮上してきます。つまり先にも述べたように、東ドイツの当時の歴史的な認識としては、「われわれドイツ民主共和国こそドイツ人民の民主的、進歩的な伝統を継承する国家である。それに対して西ドイツ、連邦共和国はアメリカに従属する反動で、社会主義を敵視する体制である」というところにあったわけです。ところが西ドイツが、いまや過去を、直接にはポーランドとの間で過去を清算する行為に出たとなると、これは東ドイツとしては、——結構なことではあるし、公的

には非常にこれを歓迎するわけですが——、自己の正統性をどこに根拠づけるかというところで新たな問題が生じてくることになります。それはとくに1970年代に入ってますます顕著になりました。ご承知の通り、1972年の12月にいわゆる「両ドイツ基本条約」が調印されて、ドイツ民主共和国とドイツ連邦共和国が互いに相手を独立の国家として認め合うという関係をつくるようになっていきます。そしてこうした動きは、1973年の東西両ドイツ国家の国連への同時加盟につながっていきました。いまや、東西両ドイツが別の国家として、二つの国家として同時に国連に加盟するという展開は、東ドイツにとっては実に画期的な出来事でした。それまでドイツ民主共和国という国家は、日本でもそうですが、西側世界では、国家として認められていなかったわけですが、それが、ドイツ連邦共和国と同じ資格で別のドイツ国家として国連に加入できたわけですから、これは東ドイツにとっては非常に大きな意味を持ったのです。これはたまたまですが、1973年、両ドイツ国家の国連への加盟、つまりドイツ民主共和国が、国際社会で主権国家として承認されるちょうどその年にウルブリヒトが亡くなっています。これはある意味で象徴的なことでしょう。というのも、ウルブリヒトにとってドイツは一つだったのですから。彼の認識のなかでは、「一つのドイツ、一つのフォルクの中に、二つの国家がある。やがてこの二つの国家は、何らかの形で統一を果たすであろう」というふうに考えられていました。おそらく、彼は国家連合という形での統合を思い描いていたのだらうと思います。ところが、1972年から1973年にかけての動きにおいて、二つの主権国家ができてしまいました。いわばドイツ・ネーションとの関係で二つの主権国家を位置付けると、これはどういうことになるのか、といった複雑な問題が出てきてしまったのです。

その頃から、当然のこととして、とくに東ドイツの歴史学者が検討を重ね、やがて「ドイツ社会主義ネーション」という理論づけをしようとなりました。これは、ウルブリヒトの後を継いだホーネッカーが推し進めるわけですが、「もはや一つのドイツ・ネーションは存在しない。二つのネーションがドイツにあるのだ。その一つが社会主義的ネーションだ」という理論づけです。たとえば、ヴァルター・シュミット (Walter Schmidt, 1930-) という人物が東ドイツ史シリーズ (Hefte zur DDR-Geschichte) に一つ冊子を書いています<sup>(15)</sup>。この人は自ら1970年代に「ドイツ社会主義ネーション」論を提唱した理論家の一人で、その後、自己批判を含めてその冊子を書きました。このシリーズは簡単なものですが、なかなか面白い。シュミットはネーション論の中で、エスニックな意味のネーションとしては、ドイツ・ネーションはもちろん依然として存在するが、ネーションを規定するのは、その様なエスニックな点だけではなくて、そこで具体的にどの様な共同の生活が営まれ、共通する思考が育まれてゆくのか、それが重要なんだ、と説いたのです。それがいまや東ドイツにおいては、「社会主義ネーション」として生まれてきている、簡単にいうとそういう議論です。つまりネーションなるものは、単に歴史的、文化的なプロセスの中だけで生まれてきたものではなくて、絶えず新たに規定され直すも

のであるというネーション論に基づく議論です。

しかし実際のところはどうかでしょう。先ほど私はあえて、東ドイツは、ドイツ連邦共和国とは違う独自の社会主義ネーションなんだということの理論づけをしようとした、と申し上げました。1970年代に入ると、——これはもちろん私自身はもう帰国して東京にいて、1973年から1974年くらいのことだったと思いますが——、両ドイツの国連加盟以降、東ドイツも東京に大使館を開設することとなりました。赤坂のオーアゲー・ドイツ東洋文化研究協会（Ostasiatische Gesellschaft: OAG）の建物の割と近くですが、その数百メートル離れたところにある小さな三階建てのマンションを借りて、東ドイツの大使館ができます。私が学生時代から知っている人物が先乗りでやってきて、ひどく苦勞してやっていたのを記憶しています。その初代の代理大使（Geschäftsträger）はジークフリート・フィッシャーだったのでしょうか<sup>(16)</sup>。ちょうどその大使館のレセプションで、私が公使の男を捕まえて、「近頃、『社会主義的ネーション』ということをしきりにいうが、君はどう思うか？つまり、『東ドイツには、西ドイツと違う独自のネーションができています』というのを、いま君のところでは、党やなんかがいっているが、どうだ？」と聞いてみました。そしたら、彼は「そんな事はないだろう。」というんです。「いやあ、俺たちはドイツ人だからなあ」などといって、まるで社会主義ネーション論には肩入れしなかったのを覚えています。そんなことは知らないよ、とでもいいかげんな顔をして、そんな馬鹿なことはあるかといわんばかりでした。つまり、党のイデオログはしきりに社会主義ネーション論を新たな独自のネーションであると理論化しようと試みたけれども、おそらくこういう市民層にはほとんど浸透することなしに終わったのだらうと思います。

とはいえ、議論としては、社会主義ネーションはとても面白いと思います。社会主義ネーションという概念が出てくるのは1970年代になってからだと思いますが、ただ、1970年代になって変遷を遂げるにせよ、我々こそがドイツの最良の文化の継承者だという思いはその前からずっとあったように思われます。実際、ドイツの古典文学は東側で手厚く保護され、出版もされていまして、市民も西の人よりも東の人の方が、そういったようなもの——他に読むものがなかったといえればそれまでですが——を読んでいたのではないかと私は思います。まあそれはなんともいえませんが、とにかくドイツの古典文学、文学書などは非常に目配り良く東ドイツで出版されていました。ただ面白いのは、文学でいうとたとえば、フォイヒトヴァンガー（Lion Feuchtwanger）という作家をご存知でしょうか。大体ご存知ないでしょう。日本では、この作家はまるで無視されていますし、西側でもほとんど無視されています。ですが、これは東では、ほとんどの全作品が出されていて、私もかなり持っています。なぜか。ある著名なドイツ文学者に聞いたら「ああ、あれはユダヤだからね！」という言い方をしました。これはまさにユダヤだからなんです。それは、ほんとに西では、文学の作品の質からいうと通俗的といえれば通俗的ですが、しかし小説<sup>ロマーン</sup>としてはとても面白い。それを西では無視していました。興味深い

ことに、トーマス・マンはもちろん出てきましたが、トーマス・マン以上にその兄貴のハインリヒ・マンが東ドイツでは愛されていたのです。ハインリヒ・マンも、西ドイツではあまりポピュラーではないと思いますが、東ドイツではよく読まれていました。これも、ハインリヒ・マンとトーマス・マンの兄弟喧嘩といいますが、戦争や民主主義に対する思想的立場の違いがもとで起きた有名な兄弟論争がありまして、これはなかなか面白いですが、ハインリヒの方は1949年には東ベルリンのドイツ芸術アカデミーの会長にも選出されるほど、東ドイツでは重要だと思われた作家でした<sup>(17)</sup>。

## 結びにかえて

1970年代にみられた基本的な考え方は、ネーションが同じか違っているかはともかくとして、いまやドイツには二つの主権国家があり、お互いに共存しあうというものでした。そしてその体制を保証する国際的な枠組みとしてできたのが、全欧安全保障協力会議（Conference on Security and Cooperation in Europe: CSCE）でした。これは、1975年にヘルシンキでヨーロッパおよびアメリカ、カナダの35カ国首脳が集まって設立された組織でした。このとき「ヘルシンキ宣言」の最終文書を調印します。ここで合意されたのが、東西両ドイツという主権国家の存在を含むヨーロッパの現状を、お互いに集団的に保障しようという安全保障体制です。いわゆる「ヘルシンキ体制」ですね。これが1975年に調印されました。ここでまさに、第二次世界大戦後に起こった国境変動を既成事実として認めて、この改変は許さないという体制ができあがったこととなります。これは東ドイツにとっては非常に重要なことで、1970年代から1980年代にかけて、ことあるごとに「ヘルシンキ体制・全欧州安全保障体制」の重要性が喧伝されることになりました。

振り返ってみると、1975年というのは、ある意味では象徴的な年で、ヨーロッパでは「ヘルシンキ体制」ができあがり、そして他方アジアではご承知のとおり、ヴェトナム戦争がヴェトナムの勝利で終わる、という年です。私にとっては、世界史というのは大体1975年で終わってしまっていて、1975年以降のことはもう訳がわからない、という感じがしてなりません。1975年以降起こったことは一体何なのか、本当に訳がわからないのです。

ただ、実際の体験からいいますと、東ドイツの社会主義ネーション構築の試みが、何の痕跡も無く終わったかどうかは、疑問の余地のあるところでしょう。現実問題として、未だに、旧東ドイツの影を引きずって生きている人たちが沢山いるわけですから、その辺がなかなか難しいところです。しかも、現在、「ドイツのための選択肢（Alternative für Deutschland）」などという運動がとくに、かつては労働運動の中心地であったザクセンで非常に影響力を拡大していることから考えると、いったい私がここでお話ししたようなかつての東ドイツの努力、つまりドイツ史のなかの民主的な伝統を我々は継承し、それを深めていくんだというような努力は、

一体どのような実を結んでいたのかと、あらためて問い直す必要があるように感じます。実際、テューリンゲンは状況が違います。テューリンゲンでは、ザクセンと隣なのに「左翼の人びと」という政党が、与党州政府の連合に加わるなど、ザクセンとは明らかに違った動きがみられます。そういう意味では、ザクセンの特殊性といったものを考えるべきなのか、そのあたりはこれからまた検討していかなければならないことだろうと思います。

[付記：本稿は、2009年8月2日（東京大学）、2009年10月18日（東京大学）、及び2018年2月28日（明治大学）の3度にわたって行われた講演の記録をもとに、大幅な加筆修正を行ったものである。]

#### 注

- (1) W・G・Z・ブトリッツ著『ドイツ現代史：元外交官の思い出』（谷村暲訳）、みすず書房、1960年。
- (2) 東ドイツ、社会主義統一党の機関紙。
- (3) Rundfunk im amerikanischen Sektor のそれぞれの語の頭文字をとって RIAS と呼んだ。
- (4) 1953年から1954年にかけて設立された西ベルリンの州立公共放送。
- (5) 国際民主婦人連盟 (Internationale Demokratische Frauenföderation (IDFF) (frz. *Fédération Démocratique Internationale des Femmes*, FDIF; engl. *Women's International Democratic Federation*, WIDF)。
- (6) エフセイ・グリゴリエヴィチ・リーベルマン「計画、利潤、及び報奨金」のこと。1962年に『プラウダ』に掲載された。
- (7) 芝田進午氏による科学技術革命についての論文の翻訳は、Shingo Shibata, "Zur Theorie der wissenschaftlich-technischen Revolution", in: *Historischer Materialismus und Sozialforschung. Ein Sammelband mit Beiträgen von Soziologen aus Japan und der Deutschen Demokratischen Republik/* im Auftr. der Sektion Soziologie der Vereinigung Philosophischer Institutionen hrsg. von Hermann Scheler. [Die japanischen Beitr. wurden übers. von Yuichi Shimomura] (Berlin: Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1966), 21-50.
- (8) ベルザーリンは、戦後直後のベルリンにおいて、ソ連占領軍の指揮官を務めた人物。現在はベーターズブルガー通り。
- (9) Institut für Geschichte der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin (Hg.), *Deutsche Geschichte in Daten* (Berlin, 1967).
- (10) Alfred Anderle u.a. (Hg.), *Weltgeschichte in Daten* (Berlin, 1966).
- (11) *Meyers Neues Lexikon in acht Bänden* (Leipzig, 1961-1964).
- (12) Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der SED (Hg.), *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung in acht Bänden* (Berlin, 1966).
- (13) Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der SED (Hg.), *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung. Chronik*, 3 Bde., (Berlin, 1965-1967).
- (14) Joachim Streisand (wissenschaftlicher Sekretär des Autorenkollektivs), *Deutsche Geschichte*, VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, 3 Bde., (Berlin, 1965-1968).
- (15) Walter Schmidt, *Das Zwei-Nationen-Konzept der SED und sein Scheitern. Nationsdiskussionen in der DDR in den 70er und 80er Jahren*, (Hefte zur DDR-Geschichte, 38), (Berlin: Gesellschafts-

wissenschaftliches Forum, 1996).

- (16) Siegfried Fischer (1934)。なお、1974年から82年の大使はHorst Brieで、その後任のHans-Dieter Jägerが82年から88年まで大使を務めている。また、Jägerは大使就任前から公使などとしても在日本DDR大使館に勤務した。
- (17) ハインリヒは、1950年に死去したため、このポストに就くことはできなかった。

## 解 説

下村由一氏（千葉大学名誉教授，1931年生まれ）は，ドイツ近現代史を専門とし，千葉大学文学部史学科在職時代（1975年4月～1996年3月定年退職）から多くの研究業績を発表してきている。氏が取り扱ったテーマは多岐にわたるが，とりわけ二つの柱において精力的に研究を進めてきているように思われる。

一つは，「ユダヤ人問題」に関する研究である。この領域で下村氏は，一見相反するシオニズムとアンティセミティズムの思想がその基底において同質性を有していることを早い段階で看破するなど，日本における「ユダヤ人問題」の歴史研究者としてその地歩を固めたといえる<sup>(1)</sup>。もう一つの研究の柱は，東欧の歴史，なかんずく東ドイツをはじめとする社会主義国家のネーションの問題にあり，早くは1977年に発表したネーションと社会主義に関する論文や1990年には東ドイツの改革の実態を論じるなど，現代的な問いにも歴史的な視座から向き合う姿勢を貫いてきたように思われる<sup>(2)</sup>。その後，下村氏は，「ユダヤ人問題」をさらに普遍的に問うべく，マイノリティの歴史という観点を取り入れ，その成果の一部を『マイノリティと近代史』として上梓した<sup>(3)</sup>。千葉大学を定年退官後も精力的に研究活動を行ってきているが，たとえば1968年の学生運動の時代について東欧などの動きにも目を向けた，ノルベルト・フライ『1968年——反乱のグローバリズム』<sup>(4)</sup>の翻訳を通じ，日本における西洋現代史の発展に寄与してきたといえよう。

ところで，下村氏の社会主義的なネーション建設へのご関心は，氏自身の個人史という形をとってもう一つの生きた現代史を生み出しているように思われる。なぜなら，1960年9月から東ベルリンに留学していた下村氏は，日本人としては，翌年8月のベルリンの壁建設を目撃した数少ない「生き証人」だからである。しかも氏は，壁建設の前後に多くの東ベルリン市民が西ベルリンへと急ぐなか，その後も東ベルリンにとどまり，1968年に日本に帰国するまで同市に暮らすという稀有な経験をした人物である。そして，東ベルリン滞在中は研究活動の傍ら，日本側の通訳として，フルシチョフ，カストロ，チャウシェスクらが出席していた東ドイツ第6回党大会に参加するなど，中ソ論争の舞台裏に関わっていったのである。その時の経験を論じたのが，本紙に掲載する論考である。

本稿の基礎をなすのは，下村氏が3回にわたって東ドイツ時代のことをテーマに行った講演の記録である。第1回目は2009年8月2日に，第2回目は，2009年10月18日に，それぞれ「下村由一先生を囲んでDDR時代のお話をうかがう会」として，東京大学駒場キャンパスにて行われたが，公刊されることのないままであった。しかし，かねてからネーション論に関心を寄せている解説者は，これらの講演会開催について聞き及んではいたものの，当日参加することはかなわなかったため，大変残念に思っていた。



2度の講演会からおおよそ9年が過ぎた2018年1月、解説者は下村氏にお会いし、上記の講演の記録が未刊行のままになっていることを知った。そこで、氏をぜひとも明治大学の方に招へいし、あらためて実際に東ベルリンでご経験されたことを中心に、社会主義ネーションの理想と現実を語ってもらえないかと依頼したところ、氏は快く引き受けくださった。そして2018年2月28日、西洋史学専攻の特に近現代史に興味を持つ学生を対象に、明治大学駿河台キャンパスにおいて、特別セミナーとして、第3回「下村由一先生を囲んでDDR時代のお話をうかがう会」を開催した次第である。今回寄稿された論考は、基本的に3回分の講演原稿をもとに書かれたものであるが、とりわけ社会主義ネーションの問題については第3回目で詳しく扱った内容に基づいており、ドイツ近現代史研究のさらなる進展に貢献できる内容となっている。東ドイツの政治や社会はながらく政治学の分野で取り上げられてきたが、近年では徐々に歴史研究も進み、現代史においても重要かつ身近なテーマになりつつある。とはいえ、まだまだその成果は日本では十分とは言えず、本格的な研究のさらなる蓄積が俟たれるところである。このような意味でも、もはや存在しない東ドイツを生きた下村氏の語りを一つの形にまとめて記録に残し、後世に引き継ぐ学術的な意義はきわめて大きいといえよう。

なお、今回掲載の論考の基となった3度にわたる講演会の音声記録は、伊豆田俊輔さん、田村円さん、宮野悠さん、新藤真理さんの4名が文字起こししてくださったものである。記して感謝いたします。

(コーディネーター：水野博子・明治大学文学部教授)

#### 注

- (1) 下村由一「アンティセミティズムとシオニズム——その同質性——」『思想』1975年4月，pp. 90-105。
- (2) 「東ドイツ ネーションと社会主義—ベルリンの「壁」から一六年」(社会主義国における苦悩と模索)『現代と思想』29, 1977. 09, pp. 138-143, 及び「東ドイツの改革」『八九東欧改革』講談社, 1990年などを参照。
- (3) 下村由一・南塚信吾編『マイノリティと近代史』彩流社, 1996年。
- (4) ノルベルト・フライ『1968年——反乱のグローバリズム』(下村由一訳), みすず書房, 2012年。

## Behind the Berlin Wall: The East German Experiment of Building a Socialist Nation

SHIMOMURA Yuichi

This paper considers the ideal and reality of a socialist nation from the perspective of my personal experience of living in the German Democratic Republic (East Germany) from 1960 to 1968. As is well known, all transportation routes between the eastern and western halves of Berlin were suddenly blocked in August 1961. This was immediately followed by the construction of the famous “Berlin Wall,” separating the two halves of Berlin. This incident contributed to both decreasing the social unrest caused by the numerous East Berlin citizens emigrating to Western Europe and making the boundary between East and West Berlin more visible. This increased visibility also foregrounded the silent confrontation between Soviet and U.S. tanks on opposite sides. This meant that as long as neither party invaded the other’s sphere of influence, both parties would maintain political stability. The citizens of East Berlin adapted to these circumstances quickly.

It was also during the 1960s that the phases of opposition under the Cold War changed. This change was most pronounced in the emergence of the Sino-Soviet dispute. Referring to my own experience as both a translator and an interpreter at international congresses of the socialist bloc during this period, I argue that the Sino-Soviet dispute originated from their different positions on the role of the United States, as well as the ideology of “Peaceful Coexistence,” which was developed as the new Soviet foreign policy. A further point of dispute was the question of the so-called “New Economic System” adopted by East Germany in 1963, because it conflicted with Chinese Communism.

As the New Economic System developed, the East German government made every effort to create the true “German Nation” by strengthening its own intellectual culture and arts. It was in this context that East Germany claimed to have inherited democratic and progressive traditions from the German national culture. At the end of the 1960s, however, East Germany realized the necessity of redefining its own legitimacy, as West Germany began to reconcile with Poland with respect to the National Socialist past. In this context, the Basic Treaty was signed in December 1972, and both the Federal Republic of Germany and German Democratic Republic finally recognized each other as independent nations. Subsequently, East Germany started its attempt to theorize what the socialist German nation could be. This ideal never spread among ordinary East German citizens; however, it is necessary to understand that some traces of this attempt are retained in the present-day post-Communist German state. On the other hand, it is also true that the current right-wing German nationalist movement “Alternative for Germany” is gaining popularity in the former *socialist* state of Saxony. In this sense, I consider it necessary to view East Germany’s effort to develop the idea of a socialist German nation as the heir of German democratic traditions in the broader context of the history of the German nation.

**Keywords:** Socialism, Cold War, Modern German history, East Germany.

